

## 琵琶湖疏水と田辺朔郎 その2

(つづき)

航空宇宙工学専攻 吉田英生

### 4. 田辺朔郎が北垣国道に出会うまで

話は前後するが、田辺朔郎の生い立ちを簡略に追ってみる。田辺朔郎は文久元年(1861年)11月1日、西洋砲術家の田辺孫次郎・ふき子の長男として生まれた。『田辺家は代々学問を以て幕府に仕えて来た家柄で、祖父田辺石菴は昌平黌教授や甲府徳典館の学頭をつとめた儒者だった。』<sup>1)</sup>しかし、朔郎の生後9ヶ月、孫次郎は異国渡来の麻疹のため42才で病没する。朔郎は父を亡くした上に旧幕臣の家系のため苦境の中で育った。しかし、徳川家が駿府に封を得て70万石の一大名になったとき、帰参を許された旧幕臣は静岡に移住することになったので、孫次郎の弟の田辺太一が沼津の兵学校で教鞭をとるようになった関係で朔郎も沼津に移った。太一は昌平黌卒業後、幕府の外国方に出仕し外交畑を歩いていたため、沼津に移った後も、その外交手腕を買われて新政府の外務省への強い任官要請がなされた。当初は「おれが天朝の禄を食(は)めるかい」と拒否していたが、明治4年11月12日、岩倉具視らの欧米視察団に第一書記官として出発した。これに伴って朔郎も湯島に落ち着いた。

明治6年9月13日、1年10ヶ月ぶりに岩倉具視らの欧米視察団が、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギー、イタリアなどを回って帰国し

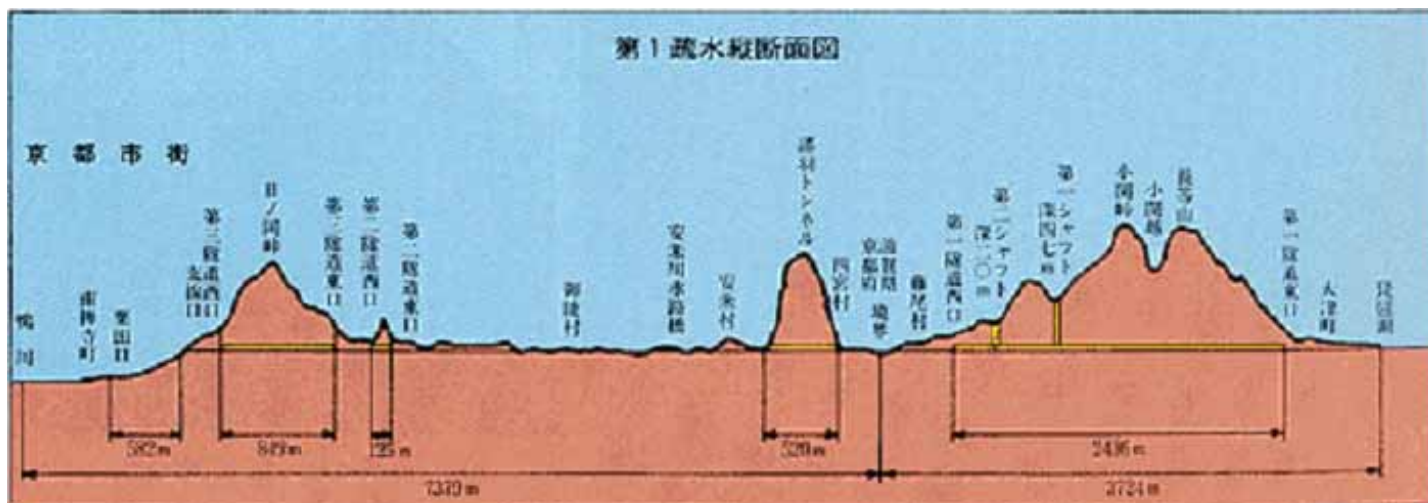


図2 疏水縦断面図

た。このとき朔郎が横浜港まで太一を迎えに行き、外国汽船ゴールデンエイジ号に乗せてもらって機関室にある蒸気エンジンを見たことが、朔郎が工学に取り憑かれる重要な契機となった。太一の勧めもあり、明治8年5月、朔郎は13才で工学寮附属小学校に入学した。明治10年、工学寮は工部大学校と改名され、朔郎は入学した。同期生は35名で、このときの校長が大鳥圭介である。工部大学校では6年間の就学期間を3分して2年ずつ、普通科、専門科、実地科としていた。3年生になって朔郎は専門科として土木科を選んだ。当時の工部大学校の学生は新生日本を背負う気概であり、朔郎もその一人として「東京湾築港計画」を時の東京府知事松田道之に建白した。しかし、採用には至らなかった。5年生になって、実地科では、学生は工作局の辞令を受けて全国に赴き実地研究を行う。その実地研究が卒業研究となる。朔郎の辞令には「学術研究ノタメ東海道筋並ニ京都大阪出張申付候 明治十四年三月十八日 工作局」とあった。

明治14年10月、朔郎は湯島から京都に向けて出発した。当時、鉄道は東京～横浜と神戸～膳所が開業しているだけで、横浜から大津付近までは徒歩の旅である。三条まで歩き通した朔郎は、辿り着いた府庁勧業課の丹羽圭介七等属から、たまたま琵琶湖疏水の路線調査のことを聞かされた。朔郎は迷わず受け入れ、



図3 琵琶湖疏水水系図 (http://www80.sakura.ne.jp/~agua/biwacanal/route.html より)

2ヶ月ほど路線調査に没頭して、年末に東京に戻った。調査中のけがで右手が不自由になった朔郎は、左手で卒業論文「琵琶湖疏水工事の計画」(英語)の執筆に着手した。明治15年4月に北垣知事が上京し、山田顕義内務卿、品川弥二郎農商務省小輔、井上馨参議、松方正義大蔵卿、山県有朋参議、榎本武揚外務大輔らと交渉を重ねた。そして、開拓使時代に面識のある工部大学校の大鳥圭介校長を訪ねたとき、大鳥から引き合わせたのが卒業論文執筆中の田辺朔郎だった。

## 5. 不退転の北垣知事と起工特許

明治16年5月15日、工部大学校を卒業した田辺朔郎は京都府御用掛となり、総工費額を60万円と見積もった。北垣の努力で11月7日には勸業諮問会において全会一致で琵琶湖疏水起工に賛成を得、11月17日には上・下京連合区会で琵琶湖疏水工事議案を出席議員52名中49名賛成で可決した。しかし12月に行われた内務省や農商務省相手のトップ会談では、薩摩と長州の派閥争いという面もあり、すんなりとはことが運ばない。それだけでなく、京都に隣接する滋賀県や大阪府からも種々の利害がからんだ反対の火の手があがる。最後に内務省土木局が、起工特許ではなく、総工費として当初の60万円から65万円の増額を伴う工事計画の修正を求め、北垣に選択を迫った。このような工費増額分を京都府民が持つという不退転の決意の下に、琵琶湖疏水起工特許が下ったのは明治18年1月29日であった。図2と図3に、それぞれ琵琶湖疏水の縦断面図と水系図を示す。(つづく)

文献

- 1) 田村喜子：京都インクライン物語，(1982)，新潮社。

---

【お詫びと注】 前回冒頭のアンケートをしたエネルギー変換工学の講義は2003年でした、現在は担当しておりません。この記事は2003年の機械学会RC196研究分科会に報告致しております。

---

## —— 京機短信への寄稿、宜しくお願い申し上げます ——

【要領】

宛先は京機会の e-mail: [jimukyoku@keikikai.jp](mailto:jimukyoku@keikikai.jp) です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願い致します。

# 今、技術を考える

その 39

石田靖彦 1964 年卒  
<isiyas@aa.bb-east.ne.jp>

## 17 南轅北轍

(つづき)

技術の研究開発は知的な仕事であり、創造力を掻きたて、世のため人のためになり、人類の進歩に貢献する...そう思って技術者になった人は少なくないと思う。そして実際に、技術の研究開発は面白く楽しい仕事で、人を相手とする仕事のような煩わしさもない。だがそれだけに、その中にはまり込んでしまい、技術の負の面に対する配慮が抜けてしまうことにもなる。また、技術開発にはそのような純粋な面がある一方で、実際の技術開発の最も大きな推進力になっているのは物欲にほかならない。経済利益の独占権を与える特許制度が技術開発を奨励する最も効果的な手段であることがそれを証明している。市場経済を真っ向から否定し、特許法もなかった以前の中国でも、文革時代の一時期を除いては、発明者に高額の報奨金を与える発明奨励制度があった。もちろん、個人個人が自分自身や家族のために少しでも多くの経済的収入を求めて働くのは極めて自然な行為であり、それを認めることが民主的で公平な社会の基本的な原則であることは否定しようがない。私益追求が個人単位に留まっていれば、その活動は小規模で社会的影響力は小さく、個人の人生観や道徳観にも規制されるので、全体を総合しても地球環境に限度を超えた負担をかける心配は少ない。土地に密着した個人単位の活動では、ハーディンの言う共有財産の悲劇は生じることなく、反対に、土地の生産性が子々孫々まで衰えることなく持続できるように、地域や共有財産を大切に保護する力が働いた。しかし、技術開発には資金と組織が必要だから、個人では難しい。ほとんどの技術者は民間企業に属することになる。ところがその企業は激しい経済競争の中で今すぐ私的利益を上げることに精一杯で、世の中のため、子々孫々のためなどと考

この記事中の地図・写真等は、本文と関係ありません。



<http://www.sanyo-solar.net/solar2.html>

て利益を後回しにすれば、どんな大企業でもたちまち苦境に追いやられる。ここでは大規模かつ組織的な活動の100%が際限のない物欲に向けられ、個人的な

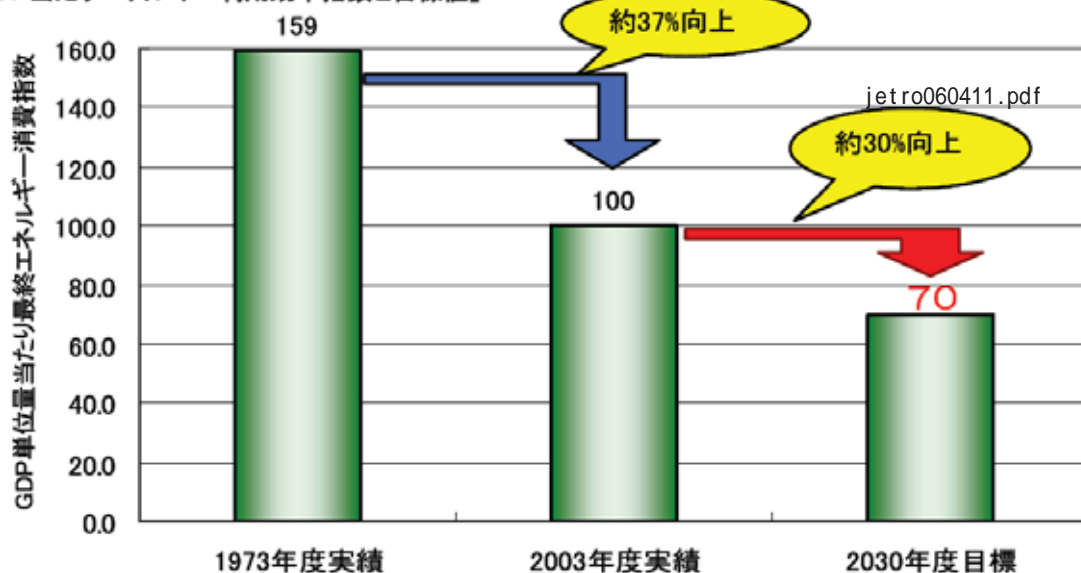
人生観や道徳観は一切無用となる。 大企業になると原材料の入手先も製品の販売先も不特定の地域になるので、共有財産の保護には無頓着で、我が製品のために資源を少しでも多く使うことに全能を傾ける。 それに奉仕するのが技術である。 公的な機関による技術研究も、そうした企業の群から成り立つ工業社会の枠組みから離れられない。 独立法人化は私益追求の民間技術との密着をますます強めるだろう。 こうして、企業経済が大規模になればなるほど、共有財産の悲劇がそっくり再現し、地球の資源は急速に消耗する。

この連載では、社会の持続可能(持続確実)という見地から技術を考えてきた。 では持続可能(持続確実)にするにはどうすべきかと問われれば、その回答は簡単でもあり、難しくもある。 簡単というのは、現在の生活が地球の限界を超えているという現実を認め、健全な社会の持続を思い、技術の方向を変え、環境的に持続確実な限度内に納まるまで生活を簡素化すればよい。 これにはそれ相応の諸制度が必要だが、物理的にも技術的にも困難はなく、経費もかからないから、その気にさえなれば必ずできる。 例えば、自動車の環境負担、安全、渋滞の問題を著しく軽減する最も効果的な方法は、自動車やそれに関連する施設をますます複雑で手のかかるものにする技術を開発することではなく、最高速度を自転車並みに落とし、余分な機能や装置を省略し、小型で簡素な短距離用にすることである。 これは技術的には極めて容易であり、自動車の実質的な便利性も大幅に損なわれることはない。 自動車がそうなれば、交通体系や町の形もそれに合わせて変わって行き、今より却って便利になるかも知れない。

難しいというのは、皆がその気になることである。 ここ20年来、各国の政・官・学・財および市民団体の夥しい数の人々が地球環境問題を巡って動き回っているにもかかわらず、動き回っている本人達も含めて、本当に身に迫った問題として考える人はまだ少ないためか、大量消費社会は全く揺らぐ兆候を見せず、逆に、世

を挙げてますます規模拡大の方向に向かっている。 不景気になったと言っては消費拡大を悲痛に叫び、経済成長率が回復して消費が活発になったと言っては明るいニュースとして伝えられ、日

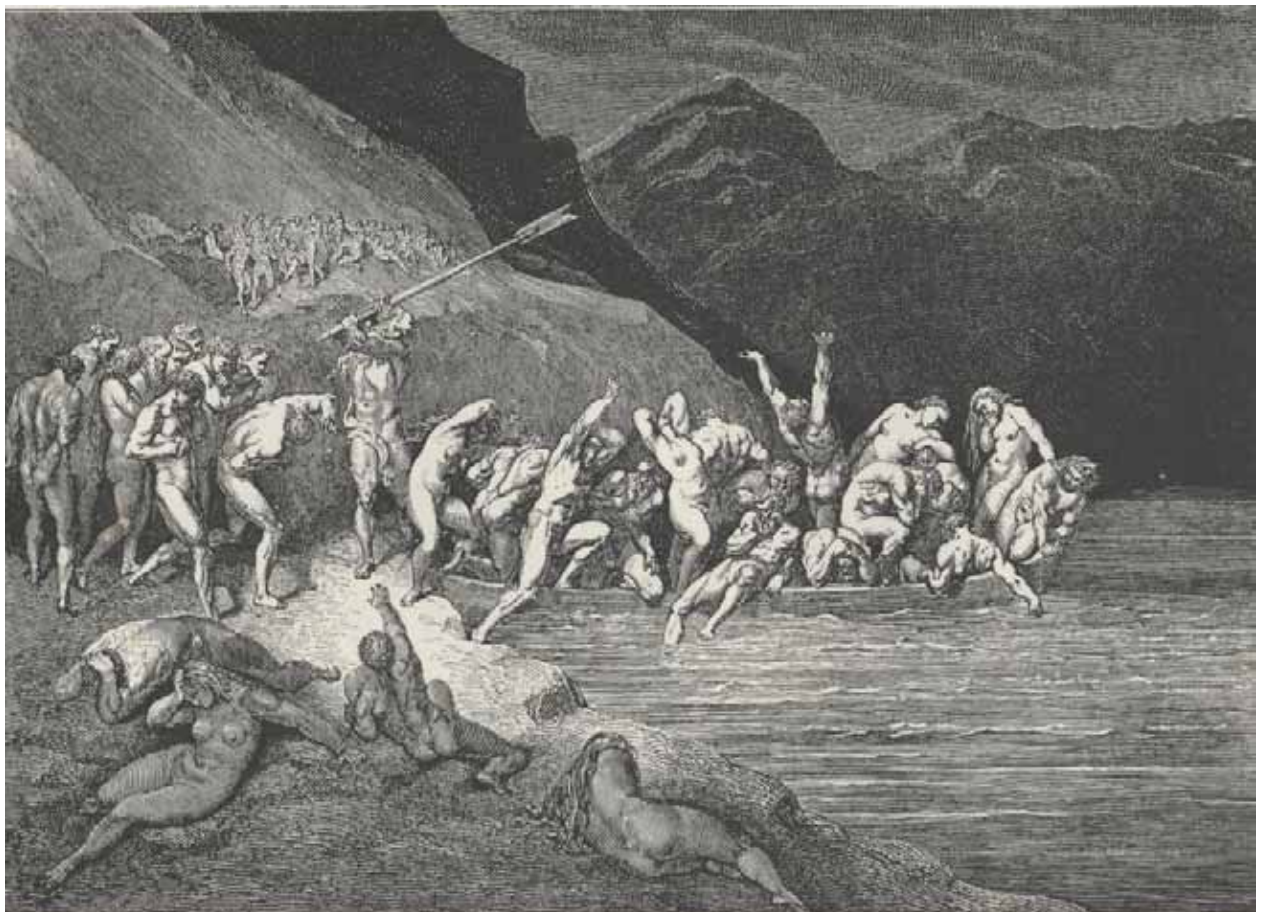
【GDP当たりエネルギー利用効率指数と目標値】



本の人口は国土の容量を何倍も超えているのに、少子化は経済に悪影響すると言って人口を増やす方法ばかりが論じられる。最近の石油価格の高騰は政治経済上の理由とされ、エネルギー資源の減少にはほとんど関心が向けられない。

このように、日欧米流の豊かな生活や経済拡大指向から離れられない人々、環境や資源の問題をことさら小さく見ようとする人々、豊かな社会を支えるエネルギーや資源が残り少なくなっても、必ず市場原理がうまく調整してくれると信じている人々、技術開発があくまでも人類の進歩であり、人々を豊かにし、地球容量の制限さえも乗り越えると心から信じている人々、そのうち必ず技術革新が起って解決できると信じている人々、持続確実性の点では疑問が多い「いわゆる自然エネルギー」や「いわゆる環境にやさしい技術」が実用化すれば問題はなくなると信じている人々が大部分を占めているように見える。これらの人々が、どうなれば持続確実かについてしっかりと理解し、生活水準の簡素化を覚悟して、経済や技術の本格的な方向転換をすることに同意するのは、限りなく困難に見える。中には、基本的には賛成だが現実には何も出来ないと弁解する人や、人間は所詮愚かな動物だから行き着くところまで行かなければ駄目だろうと言う人もいるが、これらの消極的な態度も、結局は現状を変えることへの否定である。

豊かな生活の終りは、いやでも近いうちに到来する。準備を怠り、成り行きま



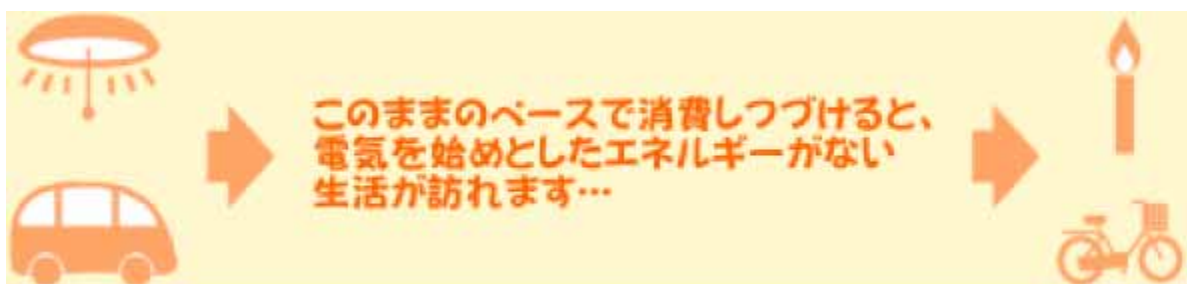
E'en in like manner Adam's evil brood  
Cast themselves, one by one, down from the shore.  
*Canto III., lines 107, 108.*

かせにしておけば、悪徳が横行し、治安が乱れ、人々のために本当に必要なところにまわすべき資源が確保できなくなり、医療も安全も福祉も衰える。人々の理解を困難にしているのは、理論が難解だからではなく、理解したくないからであろう。

癌になっても告知されたくない、見つかるのが怖くて検診を受けたくないという気持ちと同様に、怖い現実を知らないままで過ごしたいのは人情である。しかし、生活の簡素化は、実際はそれほど恐ろしいことではなく、むしろ今より快適になるかも知れない。今必要なことは、まず理解することである。無理な行動をしなくてもよい。将来の方向を理解し、その方向に進むという気持ちを持ち続ければ、無理をしなくても、日常生活でも仕事でも、自分の言動に必ず何かの形で影響が現れ、周囲にも理解者が増える。理解者が増えれば、先に立って積極的に活動する人、より適切な政策や制度を提案する人、その方向に合った新しい技術を提案する人も現れ、世の中の動きが加速され、自分自身も新しい変化に適応しやすくなる。

そうして世の中は変ってゆく。これが社会の普通の変化の仕方であろう。技術に關与している人達の中には、個人としては純粋な理想を持っていても、自分が現に身を投じている技術が本当に人類を末長く幸せにするのかを考えて、疑問を抱く人も多いのではないかと。技術者に限らず、企業人と雖も大半の人達は、個人の内から出る意思として物欲第一に走っているのではなく、現在の経済社会の中で、不本意にもそれを余儀なくされているのであろう。実際には、際限のない物欲より、人並みの生活さえできれば、世のため人のためになることにより大きな生きがいを感じる人の方が多いと思う。技術は社会で広く利用されるものである。多くの場合、技術製品を開発し世の中に提供するのには私企業であり、それを購入し使用するのも個人や私企業だが、提供することも使用することも、決して個人の問題だけに留まらず、資源の消費、環境汚染、その他さまざまな面で、社会的に非常に大きな影響を与える。したがって、技術開発も生産も、たとえそれが私企業による個人的な消費財であっても、公共的な仕事なのである。社会的影響を省みない、私欲の追及だけが動機になった技術開発ではなく、本当に世のため人のためになる技術開発ができるような仕組みができれば、技術者はより誇りを持って研究開発に全力を傾けることができるだろう。

\* この連載は、これでひとまず終了します。長い間付き合ってくれた読者の方々にお礼を申し上げます。



## 京機会九州支部の第二回行事

藤川 卓爾 (S42 卒、京機会九州支部長)

平成 18 年 10 月 21 日(土)に、京機会九州支部の第二回行事を開催しました。第一部として新日本製鐵(株)八幡製鐵所の見学会を実施しました。見学会の参加者は 16 人で、山本副所長(S52)から製鐵所の概要説明を受け、その後第 4 高炉と熱間圧延工場を見学しました。S47 年火入れの第 4 高炉は現在八幡製鐵所の製銑を一手に引き受けて、日産約 1 万トンの操業を続けています。現場では切羽から 1500 以上の溶湯が流れ出るのを真近に見た後、送風口から溶鉱炉の中を覗くことができました。熱間圧延工場では自動化された無人環境下で鋼塊が色と厚さと長さを変えながら薄板になっていくのを見学しました。



午後からは、第二部として八幡駅近くの千草ホテルに会場を移し、総会・懇親会を行いました。出席者は九州支部念願の 20 名の大会に達しました。本部の川口会長(S34)、関西支部の中谷支部長(S37)、中部支部の藤山顧問(S52)が来賓として出席されました。京都大学からは今年度から支部副会長に就任された井手先生(S52)が事務局の段様と一緒に出席されました。

総会では、藤川支部長(S42)が「九州支部の歩み」について報告した後、川口会長のご挨拶に続いて中谷支部長、藤山顧問から各支部のユニークな活動内容の報告がありました。事務報告の後、井手先生からハイテクスキャナーを駆使した「文化財保存」、そこから始まる「情報発信」をテーマとしたプレゼンテーションがありました。来年 3 月 24 日(土)に、福岡県太宰府の九州国立博物館で奥様方や子供さん達が参加できる家族連れ行事を開催いたします。



懇親会では、出席者中最年長の高橋 忠祐様(S32)の発声で乾杯し、初対面も含めて出席者同士の話に花が咲き、予定時間を大幅に超過して、井手先生の中締めでお開きとなりました。



懇親会 千草ホテルにて

## 京機サロン便り      文楽鑑賞に関する議論

京機サロンは、会合案内に「京機会々員が気楽に楽しみながら情報交換や人脈形成をはかる場をつくることになりました。幅広い見識を持って、国内外に影響力を行使しうる次世代人材の発掘と育成を図るのが趣旨です。」とあるように、交流・親睦会として発足しました。その後、京機会関西支部から補助金を受けるようになり、卒業生への社会人教育の一端を担うことも目的に加えて MOT (Management of Technology) 研究会というサブネームを持つようになりました。

いまでは更に幅広く、社会人に不可欠な教養を身につけてもらうということも事業の一環になっています。

毎年夏に開催している文楽鑑賞もその一つですが、運営委員会でなぜこの行事が必要なのかという議論がありました。「国内外に影響力を行使しうる次世代人材の発掘と育成」と、どう結びつくのかという問いですので、そこで行われた議論を紹介したいと思います。



文楽の舞台：財団法人文楽協会 <http://bunraku.or.jp> より転載

技術屋は技術さえ判れば良いという訳ではない、社会にできれば様々な問題を解決するためには広い見識が必要であるという了解はあるでしょうが、それではどういう知識・教養を身につけるのがよいのかということについて皆様方はどうお考えでしょうか。 一般的な見解を紹介しますと、

「新しい時代における教養教育の在り方について」

中央教育審議会（答申）・平成14年2月21日

「教養とは、個人が社会とかかわり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身に付ける、ものの見方、考え方、価値観の総体。中教審では、変化の激しいこれからの新しい時代に求められる教養の要素として次の5点を重視。」

1. 社会とのかかわりの中で自己を位置付け、律していく力、向上心や志を持って生き、より良い新しい時代の創造に向かって行動する力
2. **我が国の伝統や文化、歴史等に対する理解を深めるとともに、異文化やその背景にある宗教を理解する資質・態度**
3. 科学技術の著しい発展や情報化の進展に対応し、論理的に対処する能力や、これらのもたらす功罪両面についての正確な理解力、判断力
4. 日常生活を営むための言語技術、論理的思考力や表現力の根源、日本人としてのアイデンティティ、豊かな情緒や感性、すべての知的活動の基盤としての国語

の力

5. 礼儀・作法など型から入り，身体感覚として身に付けられる「修養的教養」「これらを総合的にとらえて総括すれば，新しい時代の教養の全体像は，地球規模の視野，歴史的な視点，多元的な視点で物事を考え，未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力。こうした教養を獲得する過程やその結果として，品性や品格などの徳性も身に付く。」

とされています。他の項目は比較的受け入れられやすいのですが、第2項が「国内外に影響力を行使しうる次世代人材の育成」に必要であるという認識が技術屋には無いのでないか。特に**我が国の伝統や文化に対する理解**は技術屋には必要無いと考えられているのではないかという問題提起がされました。もっとも文科系といわれる分野の人達の場合、第3項は専門家に任せてしまうという考えの持ち主も大勢いますからどちらも偏った見方しかできない原因になっているようです。

さて、**我が国の伝統や文化**といっても数多くのジャンルがあります。文楽は関西の世界に誇る文化であり、人間国宝といわれる無形文化財に指定された達人が繰り広げる舞台芸術は文化の粋であることは議論の余地はなく、これを鑑賞することは、「幅広い見識を持った次世代人材が育っていく」基盤となる教養の涵養という目的に合致するという結論でこの行事が承認されましたが、今後の運営に反映していきたいと存じますので皆様方のご意見をお待ちしております。

この議論と同時に、工学系大学院を出たような高度の知性を身につけている筈の人が悪質なカルト集団に騙されるのは教育に問題があるのではないか、京大出身者は純粋に理想を追求するというタイプが多いせいか、特にそういった傾向が強いのではないかという指摘がありました。今夏の文楽鑑賞の対象であった夏祭浪花鑑は義理人情の世界を描きながら義父を殺害するという犯罪を扱っていますし、舞台芸術には複雑な社会の中でどのように生きるかという方法論が随所に表現されていると見ることもでき、京機サロンの行事として適切であったのではないかという結論となりました。今後どのような行事が良いか、また文化的行事は年1回としておりますが、これにつきましても皆様方のご意見をお待ちしております。

京機サロンでは、社会人にとって必要なのに大学では教えられていない様々な情報を伝達する講演や実習を実施しております。この京機短信でも随時ご紹介したいと思いますが百聞は一見に如かずといえます。皆様方のご参加をお待ちしております。

文責 並木宏徳 (1969年卒業) namiki@kyobashi.net



スマイルHP : [http://www.hi-ho.ne.jp/dai2seiki/smile/smile\\_frame.html](http://www.hi-ho.ne.jp/dai2seiki/smile/smile_frame.html)

## 学生フォーミュラプロジェクト

### 今年度の総括

2006年度京都学生フォーミュラ代表  
高木隆史

チームリーダーとして活動を始めたのが、2005年度大会終了直後の9月でした。それから1年間は本当にあっという間に過ぎたというのが今の感想です。12月の京機会総会で初めて挨拶に立たせていただいてから、多くの方々に激励の言葉をいただき無事に大会を終えることができたことを大変感謝しております。

私たちチームは今年で3度目の大会参加でした。これまでの先輩方が作ってきたチームの歴史を背負って2006年度リーダーになった目標は、「大会での完走は絶対条件で準備期間をたっぷりとり走り込みをし、上位に食い込む」ことでした。目標を達成するために2005年度大会終了直後はチーム体制を整えることから始めました。総勢30名ほどになる大人数のチームをまとめるためには、各班にしっかりとリーダーを置き、役割分担をすることが大切です。それまで行き当たりばったりだったミーティングも資料を作り、記録をとるようにしわかりやすくしました。設計も各パートの担当者を統括する班長を作り、3DCADを用いてアッセンブルすることを徹底することで2重のチェックができる体制にしました。製作もスケジュールを作って期日に間に合うようにしました。

一年間の活動を終えて今年度の反省は大きく分けて2つあります。1つ目は、きちんとスケジュールを立てたのはいいのですが、管理がうまくいかなかったことです。そのため製作が大きく遅れ、テスト走行の時間が少なくなり十分な走り込みができませんでした。大会時の走りや、練習走行での走りを見ていると今年のマシンはポテンシャルが高いように思えるので、十分なテストができなかったことが大変残念です。2つ目の反省は、メンバー

のモチベーションを高く維持しきれな

かったことです。車両製作には多くの時間や労力を必要とする作業

**KART**  
Kyoto Academic Racing Team  
mail : [info@formula-kart.org](mailto:info@formula-kart.org)  
HP : <http://www.formula-kart.org/top.html>



が多いので、1年間やる気を維持するのは大変なことです。定期的に走行会に出かけたり、メンバー同士の交流を深めるなどメンタル面の管理をすることが重要だと感じました。

多くの反省はありますが、私自身は1年間精一杯活動できて大変よかったと思っています。リーダーという立場にも立たせていただき大変多くのことを学びました。大会という目標に向かってチームを動かしていく難しさ、思い通りにならないときの悔しさ、多くの仲間と共に1つのものを作り上げ苦労を共にする喜び、すべてがこれから社会に出たときの力強い支えになると思います。このような貴重な体験をさせていただき、今まで支えてくださった皆様には大変感謝しております。京機会の方々には暖かいご支援ご声援をいただき、本当に励みになりました。私は今年で引退ですが、今年なし得なかった「上位入賞」の目標を、多くの苦労を乗り越えながら後輩たちが達成してくれることを確信しています。皆様も今後とも暖かくご支援、ご声援をよろしくお願いいたします。一年間本当にありがとうございました。

## 次期学生フォーミュラ活動に際して

2007年度京都大学フォーミュラプロジェクトKART代表 堀内 亮

2007年度京都大学フォーミュラプロジェクトKARTの代表となりました堀内と申します。今年度の大会は、04年度、05年度で培った、知識と経験を集約した3号機で臨みましたが、結果としては、残念ながら昨年度よりも低い順位となりました。

それでも、3号機が完成度の高い車両であったことはメンバー全員が認めており、やはり大会前に十分なセッティングができなかったことが、大会本番で車両の性能を100%発揮できなかった一番の原因でした。それだけにもっと早く車両を完成させていれば・・・とメンバー一同悔しさと憤りを感じております。1年目、2年目と戦える車の土台を築き、ようやく3年目で完走して当たり前、いよいよ一ケタだということまで上ってきましたが、やはり最後の最後では、まだまだ粗が目立ったのが今回の大会の正直なところでした。しかし、3号機では今まで踏み込めなかった領域にも挑戦でき、それをものにできたので、次こそはこの経験を生かし、表彰台に立ちたいと思います。

私たちは既に来年度に向けて新体制で活動を開始しておりますが、この活動は学生だけの手で行うのは非常に困難であり、京機会に所属されている先輩方のご支援・ご協力なくしては絶対に成り立ちません。そこで、大変厚かましいお願いではございますが、次期学生フォーミュラ活動に対しましても、より一層のご支援・

ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

もっと速く、より速く。速さの極限を渴望するフォーミュラの世界に踏み入り、今年度で4年目となりますが、メンバー一同1000分の1秒に挑む覚悟で臨みますので、ぜひともこれからの2007年度体制京都大学フォーミュラプロジェクトKARTをよろしくお願い申し上げます。

「すべての時間を ただ一瞬のために」



ま